

# 猶播擗形人の月夜

174



紋下

豊豆付

古靴太夫

お靴申長

千本橋  
まじ屋  
の殿

月夜

## 交樂彦

四つ橋時

★ 票一のこだかく築亞東大 ★



# 乍憚口上

南方への目醒ましい躍進と日毎に高まる國威の耀きには唯々感謝感激あるのみで皆様と共に誠に大慶に存する次第でございます。就きましては當座に於ても愈々郷土藝術の本領を發揮して充分に職域御奉公の一念を徹底いたしたいと此度は更に最近我海軍の龜鑑と仰がれ賜ひたる九勇士の御事蹟の一部を謹んで上演いたし聊かなりとも精神作興の一助とも相成るを得ば幸甚と存じ特に作詞作曲を新たに御一擦に供するを始め當座傳統の秘曲狂言を種々配列いたし折からの櫻花と妍を競ふ事と相成りましたる次第に御座ります。就きましては一座大夫、三味線、人形連中には一層の精勵を以て御目見得致すを始め此度さの太夫改め八代目竹本文字太夫、常子太夫改め三代目竹本田喜太夫の襲名御披露を申し上げ、これ又之れを機會に一層相勵み可申候間何卒いづくにも倍して陸續御來觀の程を伏して御願申上奉ります。

昭和十七年四月一日

四ッ橋畔

文樂座 敬白

昭和十七年四月一日初日

初日 午後一時半開演  
平日 午後二時開演  
(終演豫定午後八時半)

・御觀覽料。

一等席 御一名 金三圓五十錢

(二階座席三十錢上り)

二等席 御一名 金一圓五十錢

三等席 御一名 金六 十 錢

(各等入場税別)

一等御座席) は五日前より  
一等椅子席

前賣切符發賣致居候

前賣切符

專用電話

南⑥四七壹壹番  
一般御用の電話 南⑦三〇三二番  
三七八八番

お草履の準備は御座りますが、靴、草履はそのまゝ御入場出來ますから御便利で御座ります。

# 四日月の形浄瑠璃

演出總形人・線味三・夫太

四 月 一 日 初 日

初 日 午 後 一 時 半 開 演  
 平 日 午 後 二 時 開 演  
 (半時八後午 定豫演終)

鶴澤八作曲・横茂都藤平振附

第一 新曲連獅子 一 幕

第二 梅川忠兵衛戀飛脚大和往來 新口村の段

第三 由良湊千軒長者 山の段

第四 義経千本櫻 椎の木の段  
小金の討死の段  
 釣瓶齋し屋の段

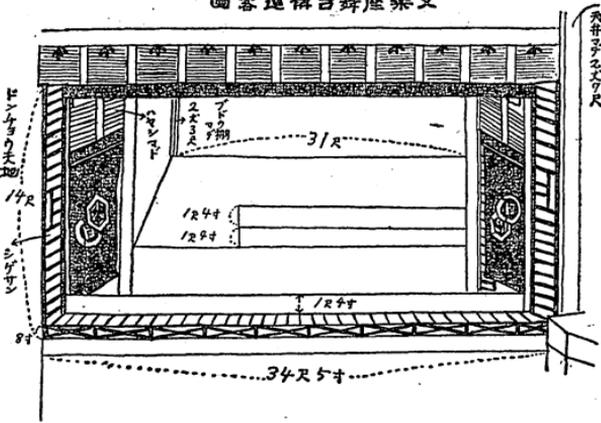
第五 水漬く屍 一幕 三 場  
大阪地方海軍人事部指導  
 西平謙作並作曲 大塚寛三舞臺監督  
 村田次生舞臺照司

第六 新版歌祭文 野崎村の段

◇幕間に大東亞戦争ニュース上映仕候



文樂座舞台構造圖



# 舞臺の「手摺」について

祐 田 善 雄

手摺即ち勾欄には三段あります。舞臺を御覽になると、舞臺鼻の處、即ち幕の外に黒いタスキのやうな形式だけの手摺がある事に氣付かれるのでせう。その裏側に電燈装置を施してある部分で、強ひて名付け

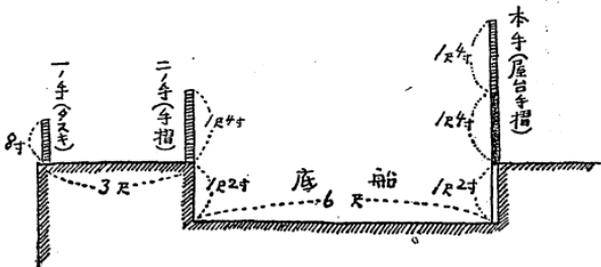
るならば、二の手に對して一の手とも言ふべきものです。そこから約二三尺の蹴込みがあつて幕が降りる、幕走りとも言ふべき空間を隔て、二の手があります。俗に手摺と呼んで居るのはこゝを名指してゐるのであつて、道路にもなれば疊にもなり、千變萬化實に調法なもので、舞臺の基調をなしてゐます。手摺の奥は船底といつて、平面より一尺二寸許り掘下げてあります。船底に續いて本手即ち屋臺手摺が設けてあるのです。屋臺を組む演じ物例へば吃又、太十、野崎等では本手を遣つて屋臺を組む二の手を道路即ち戶外と見立てる設備になつてゐます。戶外の必要がない堀川の如き場合には本手を使はずに二の手一杯に屋臺を組んで舞臺を大きく使ひます。

要之、「手摺にかける」とか「手摺に預ける」とかいふ言葉に示されてゐる通り、手摺は人形の代名詞に近いもので、人形芝居の舞臺を象徴し、人形を遣ふ基準をなしてゐます。

操芝居の手摺は近松以前の古淨瑠璃時代から現在に至る三百年の傳統を持つてゐますが、その間手摺の使命には幾多の變遷が起りました。

昔の人形は現在の如く、三人遣ひではなかつたのです。突込人形とか、差込の片手人形——現在のツメの人形の姿——とか種類はありますが、一人で一つの人形を遣ひ、手摺は人形遣の姿を隠す爲に設けてありました。

唯今の船底を深くし手摺を高くしたものです。人形遣ひの姿を隠蔽した時代には、手摺の數は一つで、背景も單なる書割に過ぎず、道具の必要がなかつたので、非常に簡単に、



斷面圖

何處でも設備が出来、緋子手摺とか衝立手摺の代用でお座敷操りを盛んに遣つてゐました。

至極手軽であつた芝居の舞臺構造にまづ最初の大きな改革が行はれたのは約二百四十年程以前の事で、出語、出遣といふ形式が採られた時に起りました。出語は言ふ迄もないと思ひますが、出遣とは手摺に據つて全く見物から遮蔽されて居た人形遣ひの姿を觀客の前に現はして人形を遣ふ新機軸の操法です。換言すれば、手摺の前の舞臺では出遣をやり、手摺の奥では人形遣は手摺に隠れて人形を操つてゐて、二段の舞臺が形成されたのです。

手摺は一つですが、上演の舞臺は手摺の前と上との二つの面になりました。舞臺場裡の擴張です。今から省れば左程にも感じないでせうが、當時としては大英斷でした。背景も舞臺装置にも一段の工夫が起るのは當然の事とせう。

その後約二十年程經過して舞臺の上に又新趣向が採入れられました。前の頃には突込人形が勢力を得てゐたのですが、この頃になると差込の片手人形が次第に優勢になつて來て、操法の便宜上より舞臺の改良を試みました

出遣には舞臺を二つの部分に使ふ關係上、出遣の部分  
を舞臺に組立て、差込の片手人形を遣ひ、手摺の部分に  
は突込人形を用ひて、兩者併用の裝置を採用しました。  
舞臺の後方には手摺があり、手摺の上では人形が種々の  
所作を演じ、人形遣ひは手摺に隠れてゐます。前方には  
家の裝置をした舞臺があり、舞臺の中に入つて人形遣の  
姿を現はして人形を遣ひますれば、舞臺の外を戸外と見  
立て、舞臺に使用して居ます。現在の手摺と舞臺手摺、  
即ち本手を逆にした形が生じました。注意すべきは差込  
と突込の二様式の人形を併用した事より、舞臺手摺の補  
助が必要になつた事です。舞臺の裝置は當時では大變評  
判で、道具建ての上手下手が人氣の對象でした。

然し兩形態の人形併用といふ變態的操法はいつまでも  
續ける事は出来ませんでした。突込、差込の特徴を採つ  
て次第に改良を加へ、現在の三人遣ひの人形が活躍する  
やうになり、舞臺も次第に現在の形式に落着きました。

現在の舞臺の細部に亘る名稱については、時代によつ  
て多少變遷してゐますが、唯今用ひてゐるものを圖示し  
て御參考に掲げておきます。

## 文樂座小史（昭和十七年調査）

- 竹本座創立（現今ヨリ二百五十八年以前）  
貞享元年二月（道頓堀西ノ芝居）
- 文樂座發祥（現今ヨリ約百五十年前）  
天明年間淡路ヨリ植村文樂軒大阪へ來ル
- 第一次稻荷社内時代  
文化八年ヨリ天保十三年ニ至ル
- 西横堀新築地濱時代  
天保十四年ヨリ安政三年ニ至ル
- 第二次稻荷社内時代  
安政三年ヨリ明治四年ニ至ル
- 松島千代崎橋時代  
明治五年ヨリ明治十七年ニ至ル
- 御靈神社内時代  
明治十七年ヨリ明治四十二年ニ至ル
- 松竹合名社繼承  
明治四十二年三月植村家ヨリ繼承
- 御靈文樂座燒失  
大正十五年十一月二十九日
- 隨時興行時代  
昭和元年ヨリ昭和四年マデ道頓堀辨天座ヲ始  
メ其他隨時興行
- 四ツ橋文樂座創立  
昭和四年十二月以來現在ニ至ル

# 新曲 連獅子



雄雌子

人獅子獅子獅子

形役

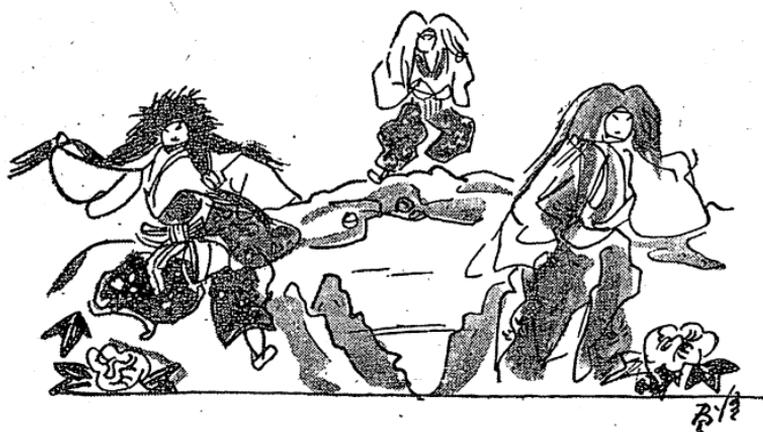
雄獅子 相生太夫  
 子獅子 つばめ太夫  
 雌獅子 和泉太夫  
 ツレ 隅若太夫

竹本 相生太夫  
 豊竹 つばめ太夫  
 豊竹 和泉太夫  
 竹本 隅若太夫  
 鶴澤 松島太夫  
 鶴澤 道八  
 野鶴澤 友衛門  
 豊澤 仙三郎  
 野鶴澤 吉蔵  
 鶴澤 清五郎  
 割田 榮三  
 吉田 榮三  
 桐竹 龜松  
 桐竹 紋十郎

能曲「石橋」より生れた俗曲の獅子の曲は、琴曲、河東節、萩江節、常磐津、富本、長唄と、凡ゆる流派に行はれて、歌舞伎の獅子の所作と結んで發達したが、本曲も長唄「連獅子」の淨曲化で、雄、雌、子の三獅子が、天臺山中石橋に現はれて、牡丹の花に戯れる様を寫した豪華な一場です。

## (床本) 連獅子

夫牡丹は百花の王にして、獅子は百獸の長とかや、桃李にまさる牡丹花の今を盛りに咲満ちて、虎豹に劣らぬ連獅子の、戯れ遊ぶ石の橋、抑々是は、尊くも文殊菩薩のおはします其名も高き清涼山、峩々たる巖に渡せるは人の工に非ずして、おのれと此處に現はれし、神變不思議の石橋は、雨後に映ずる虹に似て、虚空を渡るとくなり、峰を仰げば千丈の雲より落る瀧の糸、谷を望めば千尋なる底は何所と白浪や、巖に眠る荒獅子の猛き心も



牡丹花の露を慕ふて舞遊ぶ、胡蝶に心和きて、花に顯れ  
 葉にかくれ、追つ追はれつ餘念なく、風に散行く花びら  
 のひらりひら〜翼を追て、共に狂ふぞ面白き、時しも  
 簫笛琴箏篠の妙なる調べ影向も、今行程によも過じ斯る  
 險岨の巖頭より強臆ためす親獅子の恵みも深き谷間へ、  
 蹴落す小獅子は轉ろ〜、落つると見えしが身を翻  
 し爪をけたて、馳登るを、又突落し、突落され、爪のた  
 てもども嵐吹く、小蔭にしほし休らひぬ、登り得ざるは臆  
 せしか、アラ育てつるかひなやと望む谷間は雲霧に其れ  
 ともわかぬ八十瀬川、水に寫れる面影を見るより小獅子  
 は勇み立ち、翼なけれど飛上り、數丈の巖を難なくも馳  
 上りたる勢ひは目覺しくも又勇まし〜、獅子團亂旋の舞  
 樂のみぎん〜、牡丹の花ぶさ匂ひみち〜大きんりき  
 んの獅子頭、打てや囃せや牡丹芳々、黄金の瑞現れて花  
 に戯れ枝に臥し轉び、實にや上なき獅子王の勢ひ靡かぬ  
 草木もなき時なれや、萬歳千秋と舞納め獅子の座にこそ  
 なをりけり。





しさに、雪さへ降り籠めて年の暮と云つても人影  
少ない片山里だつた。

今日はどうしたものか忠三郎の家の界限に、節  
季候だの古手買だの順禮だのと、うさんくさい者  
たちがうろついて居た。

大阪新町の茶屋で、八右衛門への意地づくで、  
官金の封印を切つてしまつた龜屋忠兵衛は、犯し  
た罪のほども恐しく、遊女梅川と手に手を取つて  
人目を避け我が親里新口村へと落ちて來たのであ  
つた。

旅馴れぬ梅川をいたはりながら、親孫右衛門に  
は家來同然の忠三郎の住家へ立ち寄つて、忠三の  
女房の様子を聞いてみると、忠兵衛の詮議の手は  
早くも此處までのびて居ることを知つた。忠三の  
女房が二人の顔を知らぬのを幸ひ、それとは告げ  
ず留守の忠三郎を呼びにやつた。

忠兵衛が、實の親孫右衛門に直かに會へないの  
は義理と云ふものがあつたからだ。忠兵衛は養子

として早く大阪へやられ、養子親の妙閑と云ふものがあり、許嫁のおすはと云ふものがある身の上で、今度の仕儀に及んだのであつた。然し梅川と現在の様な仲になり、今大罪を犯してしまつた忠兵衛とすれば、今生の名残りに一目親の孫右衛門の顔が見たかつたのだ。

障子の内で梅川としばし涙にくれて居たが、ふと外を見ると懐しい故郷の人々が、野中の畠道を吹雪をあび乍ら道場参りにつゞくのが見えた。

その中に緞子の肩衣に老の足もとぼく／＼と近づいて来る年よりがあつた。これこそ父親の孫右衛門に間違ひなかつた。然し詞さへかはすことの出来ない今の身の因果に、忠兵衛は身もだへしたのだつたが、梅川も初めて見る我が舅、男のため孝行もしたいとつぶやきつゝも、如何ともする事の出来ない夫婦なのだ。

孫右衛門はそれとも知らず此の家の門口を通り過ぎ様とした時、ついすべつた薄永に、足駄の鼻

緒をぶつり切らして轉んでしまつた。これを見た梅川はもう黙つては居られなく、走り出て孫右衛門を抱き起した。そしてお足も洗ひ鼻緒も上げて上げませうと云ふので、孫右衛門は見なれぬやさしい女性の出現に驚いたのであつた。

様子を聞くと、たゞ旅の者とばかり舅の親父さまと同じ年配、生きうつしの懐しさに、御用に立てさせて頂きますと云ふのだ。詞の端にさてはそれと氣のついた孫右衛門は涙を押しかくし、不行跡のわが子のいとしさを、それとなく託ち、養子親の妙閑殿は忠兵衛詮議のため一昨日牢に入れられ、その義理として若し忠兵衛がこの邊へ來たら親が繩かけ渡さねばならぬ。あゝどうぞ來て呉れねばよいが、然し一日でも早く妙閑殿を牢から出すのが何よりの孝行、覺悟を極めて名乗つて出したいが、それも親の目にかゝらぬ所で、と血筋の恩愛に泣き沈んだ。

そして梅川に金一と包を與へ、これを路銀に遠

い所へ立退いて呉れ、と云ふので、梅川はその金を押いたゞき、この世の別れにその人に一目逢つてやつて呉れと頼むのだつた。

然し逢へば繩をかけるか、訴人しなければ濟まない義理固い孫右衛門だつた。それではと、有合ふ手拭で目かくしして、一と間に煩へる忠兵衛と親とも子とも名乗らず手と手を取りかはして名残りを惜んだのであつた。

折柄あたりは物さはがしく、今朝からその邊りの様子を伺つて居た巡禮たちは、捕手の役人と打ちつれ、忠兵衛の詮議に來たのだつたが、そのまゝ引返して行つたので、孫右衛門は二人を裏道から逃がし、後影の見えなくなるまで聲をしきりに叫びつゝ落ちゆく道筋を教へたのだつた。

### (佐和利) 新口村の段

コレ忠兵衛様、ほんに爰は劍の中、斯うして居ても大事ないかえ、ア、いや、男氣な忠三郎、頼んで今

夜は爰に泊り、死ぬる共故郷の土、生の母の墓所、いっしよにうづまれそなたにも、嫁姑と引合せ、未來の對面さしたいと、おろ／＼涙梅川もそれは嬉しうござんせう去ながら、私がつゝ様かゝ様は、京の六條珠數屋町、定めて此間詮議に合ふて居さんせう、かゝ様は眩暈持若もの事は有るまいかと我身のうへより案じられ、今一度京の兩親に、一目あふて死たうござんす。

お心付いたこのお金、逆様乍ら戴きます、大阪を立ち退いても、私が姿目に立てば、駕籠に目を送り、奈良の旅籠や三輪の茶屋、五日三日夜を明し、廿日餘りに四拾兩、つかひ果して二分残る、金故大事の忠兵衛様、科人にしたも私から、嗚憎からう、お腹も立とうが、因果づくすと諦めて、お赦しなされて下さりませ、親子は一世の縁とやら、此世の別れにたつた一目、逢うて進せて下さ



# 由良湊千軒長者

山の段

山の段

安壽 姫 豊 竹 呂 太 夫

對 王 丸 竹 本 文 字 太 夫

さの大夫改め

豊 澤 仙 糸

鶴 澤 友 友 平 造

鶴 澤 鶴 太 郎

豊 澤 仙 松

人 形 役

割

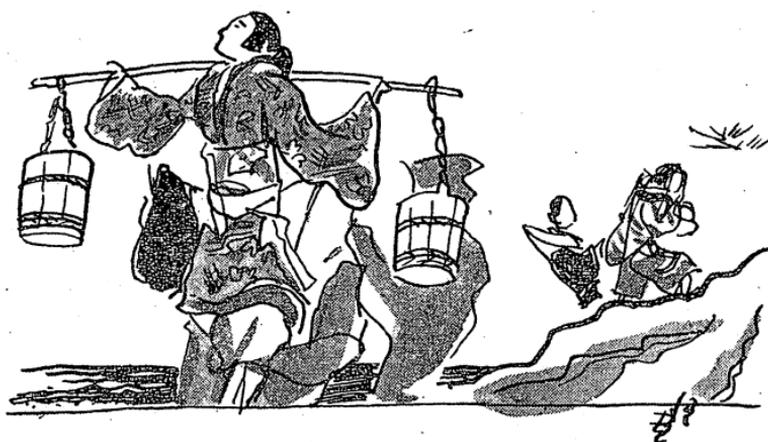
安 壽 姫 吉 田 光 之 助

對 王 丸 桐 竹 紋 司

この淨瑠璃は、寶曆十一年五月大阪竹本座で上演。作者は近松半二、三好松洛、竹本三郎兵衛等の合作。全三段よりなり、山の段はその中巻の切に當る。筋は大江時厩に頼まれて岩本政氏を暗殺して、丹後の三箇莊を興へられて豪奢な生活をする三莊大夫の許へ、政氏の遺子安壽姫と對王丸が、人商人に誘拐されて雇はれて來、毎日冷酷な待遇をうけるが、姉弟は互ひに慰め勵まし乍ら、苦しみに耐へて行く。

## (床本) 山の段

うた人の、三十一もじの種となる。由良の湊の風景は筆に及ばぬ眺とて、まだとけやらぬ谷の戸の雪をさそへる鶯の聲に春をぞ迎へける。浮世とは何の浮世に始りし其うき事の身につもる對王丸、安壽の姫、人商人にかどはかさされ、三莊大夫が手に渡り、しづが手わざの鎌拐汐



波桶のおもきより、おもき思ひの父母に死での別れ生別  
 れ、日毎の別れ姉弟が涙の種や別れが辻、エ、申し姉様  
 今日は何れもお顔のやつれ、お心悪ふござりませぬか、  
 と、様にも母さんにもお前一人を力草わづらふてばし下  
 さんすなと、くどけば姉も打しほれ、ヲ、姉弟なりやこ  
 そ其れに姉を大事にかけてたもる、コレよふきゝや、毎  
 夜々々の折檻が、病にならいでなんとせう、奥州五十四  
 郡の主、判官殿の忘れがたみといはるゝ身が、浮世をし  
 のぶ忘れ草といやしい業の下主奉公、毎日々々三前の汐  
 きのふはしづに助けられ、敷を合せし夕べのしぎ、今日  
 はたれが助けてくれふ。サア山へ行きや己しも一所にし  
 ばからふ、サア、おじやと先に立行けば、袂に取りす  
 がり姉様わしと山へいてお前の汐はたが汲ます。人に汲  
 んで貰ふてさへ、ぶち打擲の棒さんばい、つらい苦しい  
 艱難も、姉第一所に居ればこそ、辛抱も成りまする、ひ  
 よつとお前の身の上に、もしもの事が有たらばわしやな  
 んとせうどおせうぞ、サア濱へお出遊ばせわたしもとも  
 に汐汲ふ。ヲ、よふいふてたもつたのふ、自ら女子の事  
 そもじは大事の殿様の子、姉にかまはず山へいきや、イ

エ〜わたしが、イヤわしがと争ふ思ひ血筋のしんみ、  
 なく〜しぼる袖袂封王丸は鎌追取り自害と見るより取  
 すがり、氣がちがふたかコレ弟、何故死るともぎはなす  
 其手を取てコレ姉様何故とは聞えませぬ、お乳や、めの  
 とに侍れたる姉弟が、今は寒夜のあらむしろ、いやしい  
 土民に踏れたりたゝかれたり、口惜しい共無念な共名字  
 のけがれ我身のはぢ、お姉様殺して下さんせ、ヲ、道理  
 ぢやもつともじやわいのふ、扇の橋のうきなんぎ、力と  
 頼む要もちり〜、後は足弱追手のあやうさ救ふてくれ  
 ると思ひの外、兄弟のみか母様迄、人買に賣り渡され、  
 有ふ事かあるまい事か、世にも稀なる此里の三莊太夫が  
 どうよく心、賣渡されし憂き、つらさ、おいとしや母様  
 の何國にござるか知らねど、朝夕、行く時も二人が事、  
 思ひ暮し泣くらし、さぞなつかしう思ふてござろ、コレ  
 親子は一世、死で未來であわるればつれない命、生ては  
 居ぬとくどきたつれば弟も、なんぼ逢ふと思ふても、ど  
 こを尋ねるしやうどもなし、ましておよわい、生れ附涙  
 の種が病となるも、おかくれなされたら生て甲斐なき世

の中に、死にも死れぬ姉弟を、神や佛もこれ程迄、みす  
 てたもふか恨めしやと、互にひつしと抱付前後正體泣沈  
 む心ぞ思ひやられたり、いつ迄いふても返らぬこと、逐  
 ふては又難儀、そなたも山で柴仕事、姉も濱へ行きます  
 程に、けがせぬ様にしてたもや、アイ、そんならおまへ  
 もけがせぬやうに、頼む〜と泣別れ、わかれが辻を右  
 左一足いては立どまり、坂へかゝればコレ對王まだ四方  
 山に残る雪手足がこどへてたまるまい、必ず木の根につ  
 まづいて谷へ落ちてたもんなやといふも次第に遠ざかり  
 ヲ、イ〜と姉弟が、同じ思ひに引足の姉さま沙にさそ  
 はれて流れてばしたまはるなと、顔見ゆるまで延上り、  
 呼べど叫べど山彦の、音はこだまか松の風、吹はらひゆ  
 く汐衣袂隔つる春霞涙ながらにたどり行く。



人形役

親馬野彌小左衛門  
主葉大内之金衛侍吾門  
若葉大内之金衛侍吾門  
猪熊大内之金衛侍吾門  
五六代君進侍吾門  
取瓶壽し屋の段

人形役

いながみの権太  
娘彌左衛門女衛門里  
親彌左衛門女衛門里  
下彌左衛門女衛門里  
棍彌左衛門女衛門里  
若彌左衛門女衛門里  
六彌左衛門女衛門里  
女彌左衛門女衛門里  
村彌左衛門女衛門里  
取百村弥左衛門女衛門里

割

吉田田田玉  
吉田田田玉  
吉田田田玉  
吉田田田玉  
吉田田田玉  
吉田田田玉  
吉田田田玉  
吉田田田玉  
吉田田田玉  
吉田田田玉

鶴澤清太夫  
豊古靱太夫  
竹古靱太夫

割

吉田田田玉  
吉田田田玉  
吉田田田玉  
吉田田田玉  
吉田田田玉  
吉田田田玉  
吉田田田玉  
吉田田田玉  
吉田田田玉  
吉田田田玉

梗概

吉野路は下市村の片ほとり、街道すちにある茶屋の前である。  
嵯峨の庵に隠れ住んで居た平維盛の御臺若葉の内侍は、若君六代君を連れ、主馬の小金吾を供に高野に籠つてゐると聞く維盛を尋ねて吉野路へと旅立つたのである。

下市村の茶見世に歩をとどめた一行は、茶屋の女房に買物をたのんでやつた。見れば街道にある椎の太木には、木の實が澤山になつて居る。丁度其處を通りかゝつた人相のわるい男、小石を投げて椎の實を落すことを教へて呉れるので若君も大喜びで興に入つた。

やがて茶見世を出て行つたその男は、小金吾の風呂敷包みを取り違へて行つてしまつたのだ。小金吾は包を解いてみると中は張皮籠で違つてゐたその男も立ち歸つて來て取違へるの鹿相を詫びるのだつたが、自分の包が解けてゐるので、中をあら

ためると、祠堂金の廿兩が紛失して居ると云ひ出すのだ。

小金吾には飛んだ迷惑の言ひ分だつた。武士に向つて、とは云つたが、その男は威猛高になつて廿兩出せと云つて居る。さてはかたりだつたかと初めて悟つたけれど、世を忍ぶ御臺若君の御供をして居れば、事あら立てるのも却つて不利になると、それと知り乍ら廿兩をこの男に出すのだつた。御臺小金吾主従が行つてしまつたあと、歸つて來たのは茶見世の女房だつた。その名を小仙と云つた。いま小金吾から二十兩の金を銜り取つたその男は、いがみの權太と云ふ無頼者で、小仙を女房にして居り、二人の間には善太と云ふ男の子があつた。權太の父親は、この邊の釣瓶鉾屋の彌助の彌左衛門と云つて、此の村でも却々口のきける律義者だつたが、權太の行跡が悪いので、勘當同然にして居た。

小仙は最前の權太の悪事を木の蔭ではらくし

て見て居たのだつたが、女房の意見など聞く權太ではなかつた。

權太は是から又彌左衛門の留守に行つて、母親をだまして金をせびつて來るのだと云つて出かけて行つた。

夕陽も既に傾いた。御臺若君の御供をした小金吾は、下市村で朝方の追手のものに取かこまれてしまつた。追手の將は猪熊大之進、何分多勢に無勢、と云つても、小金吾一人では却々叶ひ様もなかつた。御臺若君をかばひ乍らの奮戦に小金吾は重傷を負つてしまつたが、忠義の一心に猪熊を討つことが出來たのは、天祐とも云ふべき不思議だつた。

然し手負ひの小金吾の命はもう迫つて居た。寸刻も裕餘出來ない危機の御臺若君を落し申し、その後で小金吾の命は絶えたのであつた。

其處へ夜道の提灯もおぼつかなく通りかゝつた

のは鮮屋の彌左衛門だつた。

今日庄屋に呼び出され、嗟哦の奥からこの村へ維盛の御臺若君が大前髪の供を連れて入り込んだ故、捕へて渡せと云ひ付かつたのである。

小金吾の死骸につまづいた彌左衛門は、行き過ぎ様として何と思つたか立ち戻り、捨てゝある拔身を拾つて小金吾の首を打落し、提灯も吹き消して我が家へと急ぎ歸つて行つた。

吉野路では名代の釣瓶鮮屋の彌左衛門の家には平家の落人維盛卿が彌助と名をあらため世を忍ぶ身のその日を送つて居た。

彌左衛門の娘のお里は維盛の彌助に思ひを通はず様になり、彌助もお里にはその素性を明さず、何時かお里の婿になつて居た。

彌左衛門は維盛の父小松の内府重盛の恩になつた者で、その縁故から維盛の爲には少からず心を碎いてゐたのである。

彌左衛門は未だ歸つては來ない。その留守を覗つてやつて來たのは、いがみの權太だつた。

權太は如何にもしほたらとした様子で、昨夜大盜人に遇ひ、代官所へ上げる年貢の銀三貫目を盜取られ、言譯けなくお仕置にあはうより遠くの國へ立ち退きます、と母親にかき口説いた。氣の弱い母親はうま／＼とこの權太のわなにひつ掛つてしまつた。親爺どには内緒でと、權太に云ひ分だけ銀を出してやるのだ。何か入れ物と云つてよい思案もなく、店先に並べてある鮮桶の中へ銀を入れて持ち出さうとした。そこへ丁度、あたふたと歸つて來た彌左衛門に出合ひ、銀は鮮桶に入れたまゝ、其處へ並べて知らぬ顔をして奥へ隠れてしまつた。

彌左衛門はあたりを見廻し、持つて歸つた小金吾の首を、そつと鮮桶の中へ入れて置いた。

夜も次第に更けて行つた。お里は寝仕度に氣もそは／＼して居る。これを見るにつけ、彌助の維

盛はこの初心のお里があはれでならなかつた。お里を先へ寝かせた維盛は、遙か都の空へ残して来た若葉の内侍やわが子六代君をなつかしく思つたのであつた。

一時にほと／＼と門の戸をおとなふ物音、それは女の聲で一夜の宿を、と云ふのだつた。斷りを云はんと門の扉を明けて見ると、月影にそれとまがひもなく若葉の内侍と六代君であつた。も早寝入つた様子のお里の寢息を窺つて維盛は、内侍六代を家の中へ密かに通して、この不思議な親子夫婦の對面の所以を聞くのだつた。

若葉の内侍は、姿の變つた夫維盛の身なり貌に涙した。維盛もお里と假りの契りを結んだのは、娘の戀路から大事の漏れるのを愁ひ、彌左衛門にも口止して我が身の上を明さず、義理故詮なく今日に至つたと、譯を語り聞かせた。

傍にお里は何時か目を覺して、この物語の始終を聞いて居たのだつた。

お里はこらへかねてわつと泣き出し、内侍若君をまづ／＼と上座へ直した。

其處へ来たのは村の役人、此處へ梶原様が見えます、と云ひ置いて歸つて行つた。

維盛も内侍若君も、さてはいよいよ運も盡きたかと覺悟をしたのであつたが、お里はさそくの機轉に親の隠居屋敷上市村へと逃がしたのであつた。奥に様子を聞いて居たいがみの權太は、お觸れのおつた維盛夫婦六代君、捕へて褒美にありつかんと、止めるお里を蹴倒して、最前の銀を入れた鮮桶小脇に抱へ、後を慕つて追つて行つた。

この一大事に彌左衛門もお里も母親もたゞ狼狽へるばかり、さう云ふ中にも梶原平三景時は矢筈の提灯も殿めしく、數多の家來に十手を持たせ入つて來た。

彌左衛門が維盛をかくまひ居ること訴人によつて明白、首打つて渡すか、但しは違背に及ぶか、返答如何にと、梶原は詰め寄つた。彌左衛門も腹

義經千本槌喜し屋の段  
此列以下

出豆竹古鞆太夫

相勤申枝



吉田

を据え、隠しても隠されぬ故、既に維盛の首は打つてこの通りと、鮮桶を持つて出た。母親は最前權太が銀を入れて置いた鮮桶を出されてはと、彌左衛門と云ひ争つて居る中、維盛夫婦餓鬼め迄、いがみの權太が生捕つたり、と聲高らかに呼ばはり乍ら、若君内侍を猿縛りに維盛の首を携へて來るのだつた。梶原は大満悦で、褒美には親彌左衛門が命赦して呉れう。又頼朝公着用の陣羽織、鎌倉へ持ち來らば金銀と釣替へにする、と陣羽織と引替へに繩付きを受取つて悠々と歸つて行つた。

今まで耐へて居た彌左衛門は、憎し憎しと、隙をねらつて權太の脇腹を刀で刺し通した。權太はその刃物を抑へて云つた。

こなたの力で維盛を助けることは叶はぬ〜。

前髪の首を彌助と云つて差出した所で、どうして梶原ほどの侍が瞞されませう、と云ふのだ。彌左衛門は最前の鮮桶を開いてみると、中から出たのは銀三貫目だつた。これはと驚き様子を問へば、

さつき權太が持つて行つた鮮桶を開いてみれば小金吾の首、これ程までに心を碎く父親の心を察しその前髪を剃り落して差出したのであつた。

權太が苦しい息に取出す一文笛を吹けば、物蔭にひそんで居た維盛卿はじめ内侍六代君は、茶汲みに姿を變へて馳けつけて來た。權太が最前繩付きにして梶原に渡したのは年頃も同じ權太の女房小仙と一子善太だつたのだ。

かく善心に立ち返つた權太を刺した父親は我が不明を悔んだ。權太は今までの親不孝のつぐなひに、我が妻、わが子を血を吐く思ひで繩にかけたのだつた。維盛卿も感じ入り、頼朝への恨みの一と太刀と、最前の陣羽織を刺さんと取り上げると内や床しき、内ぞ床しきと古歌の下の句が書いてあつた。何ごとゝ縫目を裂いてみると、中には袈裟衣、珠數迄添へて入つて居た。

この謎は何だつたらう。

その昔、小松の内府が頼朝の命を助けたことが

あつたのだ。その恩返しと梶原に命じて維盛の命を助け、出家させ様と計つた頼朝だつたのである。權太はこれを聞いて猶ほ悔んだ。たばかつたと思つた梶原に却つてたばかられたのであつた。

今はの命の權太を後に、維盛卿は高野へ、内侍は六代君を高雄の文覺へ頼みに、彌左衛門を供に連れ發足するのだつた。

### (床本) 壽し屋の段

神ならず佛ならば、夫ぞとも、知らぬ道をば行迷ふ、若葉の内侍は若君を宿ある方に預け置き、手負の事も頼まんと、思ひよる身も縁のはし、此家を見かけ戸を叩き、一夜の宿と乞ひ給へば、維盛は好い退き機と表の方叩く扉に聲をよせ、此内は酢商賣、宿屋ではござらぬと愛想のないが愛想となり、イヤ申し稚きを連れた旅の女是非に一夜を宜ふにぞ、斷り云うて歸さんと、戸を押開き月影に、見れば内侍と六代君、はつと戸をさし内の様子、娘の手前もいぶかしく、そろ／＼立寄り見たまへば早くも結ぶ夢の體、表に内侍は不思議の思ひ、今のはど

うやら我夫に、似たと思へどなりかたち、つむりも青き下男、よもやと思ひ給ふ中、戸を押し開いて維盛卿、若葉の内侍か、六代かと宣ふ聲に、シエ、扱は我が夫、と様か、ノウ懐かしやと取絶り詞はなくて三人は、泣くより外の事ぞなかりき、先々内へと密に伴ひ、今宵は取わけ都の事、思ひくらし居たりしが、親子共に息災で不思議の對面、去りながら、某此家に居ることを、誰知らせしぞ殊にまた、遙々の旅の空、供連れぬも心得ずと尋ね給へば若葉の君、都でお別れ申してより、須磨や八島の軍を案じ、一門残らず討死と、聞く悲しさも嗟哦の奥、泣いてばつかり暮せしに、高野とやらんにおはすると云ふ者ある故に、小金吾召連れお行衛を、心ざす道追手に出合ひ、可愛や金吾は深手の別れ、頼みも力もない中に、廻り逢ふたは嬉しいが、三位中將維盛様が、此お姿は何事ぞ、袖のない此羽織に、此つむりはと取付て、咽び絶入り給ふにぞ、面目なさに維盛も、額に手をあて袖をあて、伏沈みてぞおはします、涙の内にも若葉の君伏したる娘に目を付け給ひ、若い女中の寢入ばな、定めてお伽の人ならん、斯くゆるかきおくらしなら、都の

事も思召し、風の便もあるべきに、打捨て給ふに胸慾と恨み給へば、ホホ夫と心にかゝりしかど、文の落ちる恐れあり、わけて此家の彌左衛門、父重盛の恩報じと、我を助けてこれ迄に、重々厚き夫婦が情、何がな一禮返禮と、思ふ折柄娘の戀路、つれなく云はゞ過あらん、かへつて恩が仇なりと、假の契りは結べ共、女は嫉妬に大事も滅すと、彌左衛門にも口留して、我身の上は明さず、仇な枕も親共へ、義理にこれまで契りしと、語り給へば伏したる娘、こたへ兼しか聲を上げて、わつと計りに泣出す。コハ何故と驚く内侍若君引連れ逃退んとしたまへば、ノウコレお待ち下されと、涙とゞもにお里はかけよ、先づこれへと内侍若君上座へ直し、私はお里と申して此家の娘、いたづら者憎い奴と、思召されん申譯過つる春の頃、色めづらしい草中へ、繪にあるやうな殿御のお出、維盛様とは露知らず、女の淺い心から、可愛らしい、いとしらしいと、思ひ初めたが戀のもと、父も聞えず母親も、夢にもしらしてくださつたら、譬へこがれて死ねばとて、雲井に近き御方へ、鮎屋の娘が惚られうか、一生連添ふ殿御ぢやと、思ひ込んで居るものを、

二世のかためは叶はぬ、親への義理に契つたとは、情ないお情に、あづかりましたとどうと伏し、身をふるはして泣きければ、維盛卿は氣の毒の、内侍も道理の詫び涙かはく間もなき、折からに、村の役人かけ來り、戸を叩いて、コレへ愛へ梶原様が見えます。内掃除しておかれいと云ひ捨て立歸へる。人々はつと泣目も晴れ、いかゞはせんと俄の仰天、お里はさつそくに心付き、先づ親の隠居屋敷、上市村へと氣をあせる。實に其事は彌左衛門、我にも教へ置きしがと、最早開かぬ平家の運命、檢使を引受け潔く、腹かき切らんと身拵へ、内侍は悲しく。コレ此若の幼い氣盛りを思召し、一先づ爰をと無理やりに、引立てたまへば維盛も、子に引かざるゝ後髪、是非なく其場をおち給ふ、御運のほどぞ危ふけれ。様子を聞いたかみがみの權太、勝手口より躍り出で、お觸のあつた内侍六代、維盛彌助めせしめてくれんと、尻引からげかけ出すを、コレ待つてとお里は取付き、兄様これは一生の私が願ひ、見放して下されと、頼めど聞かず刎飛し、大金になる大仕事、邪魔ひろくなと、すがるを蹴倒し張とばし、最前置きし銀の鉢桶、これ忘れては

と提げて、後を慕ふて追ふて行く。ノウと、様か、様とお里が呼ぶ聲彌左衛門、母もかけ出で何事と問へば娘はこれ〳〵、都から維盛様の御臺若宮尋ねさまよひお出であり、積る咄しの其中へ詮議に來ると知らせを聞き三人連れて、上市へ落しましたを情けない、兄様が聞いてゐて、討取るか生捕て、褒美にするとなつた今、追かけてと云ふより惻り彌左衛門、ソレ一大事とたしなみの朱鞘の脇差腰にぼつ込み、かけ出す向ふへハイ〳〵ハイと矢筈の提灯梶原平三景時、家來數多に十手持たせ道を塞で、ヤア老耄め何處へ行く、逃げやうとて逃さうかと追取まかれてはつと惻り、先も氣遣ひ、爰も遁れず七轉八倒心は早鐘、時に時つく如くなり、ヤア此奴横道者、おのれに今日維盛が事詮議すれば存せぬ知らぬと云ひ抜ける。其まゝにして歸へせしは、思ひよらず踏込む爲、此家に維盛かくまひある事、所の者より地頭へ訴へ、早速鎌倉へ早打、取ものも取あへず來れ共、油斷の體はおのれを取逃すまい爲、サア首討つて渡すか、但し違背に及ぶか、返答せよとせめつけられ、叶ぬ所と胸をすへ、成程一旦はかくまひないとは申したれ共、餘り御詮議強

き故、隠しても隠されず、早先達て首討たり、御覽に入れんお通りと伴ひ入れば母親、どうなる事と氣遣ふ中、鮎桶提た彌左衛門、しづ〳〵出て向ふに直し、三位維盛の首、御受取り下されよと蓋をとらんとする所を、女房かけよりちやつと押、コレ親父殿、この桶の中にはわしがちつと大事の物を入れておいた、こな様明けてどうするぞ、ホ我は知まい、此桶には最前維盛卿のお首を入れて置いた。イヤ〳〵此桶にはこなたに見せぬ物があると、引寄すれば引戻し、おのれがなんにも知らぬ故、イヤこなたが知らぬ故と、妻は銀と心得て争ひ果ねば、梶原平三、扱はこいつら言ひ合せ、縛れくゝれと下知の下縛つた〳〵と、取巻所に、維盛夫婦餓鬼め迄、いがみの權太が生捕つたり、討ち取つたりと呼はる聲、はつとばかりに彌左衛門、女房娘も氣は狂亂、いがみの權太はいかめしく、若君内侍を猿縛り、宙に引立て目通りに、どつかと引すへ、親父の賣僧が三位維盛を、熊野浦より連歸り道にて天窗をそりこぼち、青二才にして彌助と名をかへ此間はほてくろしき聲せんさく、生捕つて面恥と存じたに、思ひの外手強い奴、村の者の手がかつて、漸と討取

り、首に致して持參御實檢と差出す、オ、成程剃毀ち彌助と云ふは存じながら、先達て云はぬは彌左衛門に、思ひ違ひをさゝう爲、聞き及んだいがみの權太、悪者と聞いたがお上に對しては忠義の者、出かした、内侍六代生捕たな、ハテよい器量、夢野の塵で思はずも、女鹿子鹿の手に入るは天晴れ働き、褒美には親の彌左衛門めが命、許してくれう。イヤ、申し、親の命ぐらゐを許して貰うと思つて、此働きはいたしませぬ、スリヤ親の命は取られても褒美がほしいか、ハテあのわるい命はあのわろと相對、私には兎角お銀と願へば梶原、ハテ小氣味のよい奴、褒美くれんと着せし羽織、脱いで渡せば佛頂面、コリヤ、其羽織は忝くも頼朝公のお召かへ、何時でも鎌倉へ持ち來らば、金銀と釣替囑託の合紋と、聞くより頂き出來た々々、當世かたりが流行るによつて二重取りをさせぬ分別、ようした物と引替に繩付き、渡せば請取つて首を器に納めさせ、コリヤ權太、彌左衛門一家の奴等暫く汝に預くる。お氣遣ひなされますな、貧乏ゆるぎもさせませぬテ。扱けなげな男めと譽そやし梶原平三、繩付引立てち歸へる、ア、これ、其ついでに

褒美の銀忘れまいぞと、見送る隙間油斷見合せ彌左衛門にくさも憎しと引だかへ、ぐつと突込恨みの刀、うんとつけに反返る、見るに親子はハツはつと、憎いながらも悲しさの、母は思はず馳寄つて、天命知や不幸の罪、思ひ知れやと云ひながら、先だつものは涙にて、伏沈みてぞ泣居たる。彌左衛門齒がみをなし、泣くな女房、なにほへる、不便なの可愛なのと云ふてこんな奴を生けて置くは、世界の人の大きな難儀、門端を踏すなと云ひつけて置いたに内へ引入れ、大事の、維盛様を殺し、内儀様や若君を、よう鎌倉へ渡したな、腹が立つて、涙がこぼれて胸が裂ける、三千世界に子を殺す、親と云ふのはおればかり、天晴れ手柄な因果者に、よう爲居つたと拔身の柄、碎るばかりに握り詰め、ゑぐりかけるも心は涙、いがみにいがみし權太郎、刃物押へて、コレ親父殿、なんぢやい、此方の力で維盛を助ける事は、叶はぬ、コリヤ云ふな、今日幸ひと別れ道の傍に手負の死人、よい身替りと首討つて戻り、此中に隠し置き、コリヤこれを見居れと、鉢桶取つて折明ければ、ぐわらりと出たる三貫目、シャリ、こりや銀ぢや、こりやどうぢや

と呆れ果てたるばかりなり。手負は顔を打詠め、おいとしや親父様、私が性根が悪さに御相談の相手もなく、前髪之首を惣髪にして渡さうとは、了簡違ひのあぶない所梶原ほどの侍が、彌助と云ふて青二才を男に仕立てある事を知らいで討手に來ませうか、夫と云はぬはあつちも巧み、維盛様御夫妻の、路銀にせんと盗んだ銀、重いを證據に取かへた鮎桶、明けて見たれば中には首、はつと思へば是も幸ひ、月代刺つて突付たは矢張りお前の仕込みの首、ムウ其又根性で御臺若君に繩をかけ、何故鎌倉へ渡したぞ。ホ、其お二人と見えたのは、此權太が女房俵、ヤアシテ、維盛様御夫婦、若君は何處に、オ、逢はせませうと袖より出す、一文笛吹立つれば、折よしと維盛卿、内侍は茶汲の姿となり、若君連れてかけつけ給ひ、彌左衛門夫妻の衆、權太郎へ一禮を、ヤア、手を負つたかと驚くも、お變りないかと恟りも、一度に興をぞさましける。母は悲しき手負に取付き、かほど正しき根性にて、人に疎まれ譏らるゝ、身持はなぜにくれた常が常なら連合も、むざと手疵も負はせまい、酷い事をとせき上て、悔み歎けば權太郎、ヤレ其悔み無用、

常が常なら梶原が、身代り食ふては歸りませぬ、まだそれさへも疑ふて、親の命を褒美にくれう忝いと云ふとは、詮議に詮議をかける所存、いがみと見たゆゑ油斷して、一ぱい食ふて歸りしは、禍も三年と、悪い根性の年の明け年、生れ付いて賭勝負に魂を奪はれ、今日もあなたを二十兩、かたり取つたる荷物の中に、恭々しき高位の繪姿、彌助が面に生うつし、合點がいかぬと母人へ、銀の無心をとりに入込み、忍んで聞けば維盛卿、御身に迫る難儀の段々、此度性根改めずば、いつ親人の御機嫌に、預る時節もあるまいと、打つてかへたる悪事の裏、維盛様の首はあつても、内侍若君のかはりに立つる人もなく、途方にくれし折からに、女房小せんが俵を連れ、親御の勘當、古主へ忠義、なにうろたへる事がある、わしと善太をこれかうと、手を廻すれば俵めも、かゝ様と一緒にと、俱に廻して縛り繩、かけても、手がはづれ結んだ繩もしやら解け、いがんだおれが直な子を持つたは何の因果ぢやと、思ふては泣き、しめては泣き、後手にした其時の、心は鬼でも蛇心でも、こたへ兼たる血の涙、可愛や不愍や女房も、わつと一聲其時に、血を吐き

ましたと語るにぞ、力味かへつて彌左衛門、エ、聞えぬぞよ權太郎、孫めに繩をかける時血を吐く程の悲しさを常に持つてはなせくれぬ、廣い世界に嫁一人、孫と云ふのもあいつ一人、子供が大勢遊んで居れば、親の顔を目印に、にがみのはしつた子があるかと尋ねて見ては、コレ子供衆、權太が息子はゐませぬかと、問へば子供ほどの權太、家名は何と尋ねられ、おれが口からまんざらにいがみの權とは得云はず、悪者の子ぢや故に、はね出されて居るであらうと、思ふ程猶そちが憎さ、今直る根性が半年前に直つたら、のうば、親父殿、嫁女や、孫の顔見覺えて置うのに。オ、おれもそればかりがとむせ返り、わつとばかり伏しづむ心を思ひやられたり。内侍は始終御涙、維盛卿は身にせまる、いとと思ひにかきくれ給ひ、彌左衛門が歎きさる事なれ共、逢ふて別れ逢はで死るも皆因縁、汝が討つて歸りたる首は主馬の小金吾とて、内侍が供せし譜代の家來、生きてつくせし忠義は薄く、死んで身替る忠勤厚し、これも不思議の因縁と語り給へば、テモ扱てもそんならこれも鎌倉の、追手の奴等が皆しわざ、オ、云ふにや及ぶ、右大將頼朝が、

威勢にはびこる無得心、一太刀恨みぬ残念と、怒りに交る御涙、實にお道理と彌左衛門、梶原が預けたる陣羽織を取出し、これは頼朝が着がへとて、褒美の合紋に残し置きし、ずたに引裂ても御一門の數にはたらねど、一裂づの御手向、サア遊ばせと差出す、何頼朝が着がへとや、晋の豫讓が例を引き、衣を刺して一門の恨みを晴らさん思ひ知れと、御はがせに手をかけて、羽織を取つて、引上げ給へば裏に模様か歌の下の句、内や床しき内ぞ床しきと、二つ並べて書たるは、アラ心得ず此歌は小町が詠歌雲の上はありし昔にかはらねど、見し玉簾の内ぞ床しきとありけるを、其返しとて人も知つたる此歌をものしう書いたは不思議、殊に梶原は和歌に心を寄せし武士、内や床しきは此羽織の、縫目の内ぞ床しきと、襟際付際切りほどき、見れば内には袈裟衣、珠數迄添へて入置いたは、コリヤどうぢやコハいかにと呆れる人々維盛卿、ホウさもそうざさもあらん、保元平治の其の昔、我父小松の重盛、池の禪尼と云ひ合せ、死罪に極まる頼朝を、命助けて伊東へ流入、其恩報じに維盛を、助けて、出家させよとの鸚鵡がへしか恩返しか、ハア、

敵ながらも頼朝は天晴れの大将、見し玉簾の内よりも心の内の床しやと、衣を取てこれとても、父重盛の御蔭と頂き給ふぞ道理なる、人々はつと悦び涙、維盛卿もこれ迄は、佛を語つて輪廻を離れず、離るゝ時は今此時と、誓ふつゝりと切給へば、内侍若君お里はすがり、俱に尼共姿をかへ、宮仕へをゆるしてと願へど叶はず、打拂ひく、内侍は高雄の文覺へ、六代が事頼まれよ、お里は兄になりかはり、親へ孝行肝要と、立出で給へば彌左衛門、女中の供は年寄りの、役と諸共旅用意、手負を勞はる母親が、ノウコレつれない親父殿、權太郎が最後まで近かし、死目にあふて下されと、止むるにせきあげ彌左衛門、現在血を分けた伴を手にかけて、どう死目にあはれうぞ、死んだを見ては一足もあるかるゝ物かいの、息ある内は叶はぬ迄も、たすかる事もあらうかと思ふがせめて力草、留るそなたが胴慾と、云ふて泣き出す爺親に、母は取わけ娘は猶、不愆々々と維盛の首には輪袈裟手に衣手向の文の阿耨俱陀羅、三藐三菩提の門出、高雄高野へ引き別くる、夫婦の別れに親子の名残り、手負は見送る顔と顔、思ひはいづれ大和路や、芳野に残る名物に、維

盛彌助と云ふ餅屋、今にさかふる花の里、此名も高くあらはせり。



大阪地方海軍人事部指導

西亭謹作並作曲

大塚克三舞臺裝置

村田芳生舞臺照明

水

清

心

幕三場

おげ

出演者(順不同)

白糸 藤太夫

白澤 園子

霧次 洵延

相白 後十郎

吉田 我太郎

相白 後太郎

吉田 我太郎

相白 我太郎

吉田 我太郎

# 御挨拶

海軍特別攻撃隊の壯烈鬼神を哭かしむる壯舉は實に身も慄ふばかりの感激を以て承はり、九勇士に對する感謝の言葉は何んと申上げてよろしいか殆んど適當の言葉も見出せない次第でございます。

就きましては、當座人形淨瑠璃に於きましても、せめては感謝の一端をあらはす可く聊か御事蹟の一部を脚色さして頂きまして、皆様と共に此感激を新たにいたしたいと希ふ次第でございます。

而し、もとより充分とは参りませぬが、私共の微衷の存じまするところを御諒察願ひまして、宜敷御觀覽の程を希上します。

昭和十七年四月

白井松次郎

大阪地方海軍人事部指導  
西亭謹作並作曲  
大塚克三舞臺裝置  
村田芳生舞臺照明

# 水漬く屍

一幕三場

第一場 廣島縣下川迫村  
第二場 出發前夜(〇艦甲板上)  
第三場 川迫村上田家墓地前

〔普天の下、卒土の濱、何れか皇徳に浴せんや、皇土に生ゆる草も木も、育ぐむは露ぞ菊の花、道一筋や川迫村里も豊かに稔る穂の、空におとづる時鳥、御代もゆるかの道の邊を秋の野風に吹き流れ、いづこに聲や在郷歌、兄サ御楯よ、親たちや畑よ、ともに務めじや御國の爲じや、赤い手がらの花嫁さんも、舞さ御楯に山田守る、ほんさのんえ〕

太市「ヲ、權爺どん、えらく精さ出しなはるのふ

權「ア、太市どんけ、お前マア洋服さ着て何處行きけ

太「ウン今日は、アノ日野山の城跡サで分會の教練が

有つたで一ツ走り行て今歸りじやげに

權「ホウそふけ、そりやハア御國の爲に、若いもん達ち

人形役割

竹本 織太夫  
竹澤 團六  
鶴澤 綱延  
ツレ 胡弓

父 市右衛門 桐竹門造  
母 さく 吉田榮三  
上田 定二等兵曹 桐竹紋十郎  
梅山 海軍中尉 吉田玉幸  
權 爺 吉田玉市  
青年 太市 桐竹紋太郎

や御苦勞じやの、それやそふと、上田の定どんが歸つて居るがお前ア會ふだけ

太「ウン 會ふた

權「ありやまあ感心なもんじやの、たまの休みに歸つてもハア休みもせず、がせえにおつ母の手助け、之れ之の、秋祭りも待たずに、もふ歸るげなが

太「ウンあん人ア孝行もんじやよ、昨日ア野良着きての畑サ行くんじやつて、今朝また軍服での墓参りの歸りじやつて村方の人にもよろしふつての中々感心なもんじや

權「そふじやげ、また、あのおつ母アもがせえもんのヲ太「ほんさ、この親にしてこの子有りだがすの

權「そげえなむつかし事ア解らんが、マア何にしても若いもんナ見習ふ事ツじや……イヤイヤ若いもんの事よりや、おらも精サ出して、この親……とやらとほめてもろふけ

太「イヤ、權爺ども、年サいかして若いもんにも負けずに、村の者ア皆感心しとるけん

權「エーイおだてるでねえ、ハ、ハ、ハ、ンナラ太市どん

また晩に話をけえ

太「ン權爺どん、足元サ氣付けて行かつせいよ

權「ウン、有りがつと

老も若きもなごやかな、道は分かれど一筋に我家我家

へ歸るさの

へ何れ其時きや白木の箱よ、又の逢ふ日を九段坂

其の九ツの御柱と、知る由もなき母親を、連れ立ち行

くも終りぞと、心に定二等兵、顔にも出さず秋晴れの野

面にほころぶ稻の穂も笑顔で渡る可愛川、樂し團樂の一

つ道

定「おつ母さん、よい景色ですなア

母「さふかのふ、わしやいつも通るげに、そふも思わん

が、お前アママたまたに歸つてじやけ……そふも見える

んじやよ

定「イヤ、いつも變らぬこの眺めも、今日は別して美し

く想ひます。アノ日野山の城跡、可愛川の流れ……子

供の時分はあの城跡まで蜻蛉つりと行つたり、可愛川

では石遊びしたり……、おつ母さん、随分御苦勞かけ

ましたナア

母「なにを定、思ひ出した様に……なんげ、しかしのふ

定、お前も今は日本の海軍さんじやけに、天子さまや

お國の爲、立派な務め忘れん様にの、そして又、方々

の國々の人さも寄つてじやるふに、お友達にも憎まれ

ん様にのふ

定「ハイ……おつ母さん、御教訓はしつかりと、決して

……決して忘れは致しません

母「ほんさ、もう會はれんかの様子の、ハ、ハ、ハ、女はこ

せつくでのふ、氣んすなよ……病氣アせんよふにの

定「ハイ、……おつ母さんも御無理をして、お體をそこ

なわぬ様……お氣を付けて下さい

母「ンン、おつ母アまだく丈夫じやけに、内の事ア心

配せず、御奉公サ大事に、立派な兵隊さんに成つてお

くれよ、もしか時は人様に笑はれん様にの、お父つさ

んもそれを言ふてじやけ

定「ハイ、お父さんにもよろしく申し上げて下さい……

定「それから……これはお父つさんに渡して置こふと思

ひましたが弟や妹に菓子でも買つてやつて下さい

母「お前エそんな事せんがえ、お前も何かといるげに

定「イエ〜僕はよろしいです

母「そんな事

定「イエ〜心配せずどうか

母「なにけ

定「イヤ、ナ、何んでもありません

それではおつ母さん、いつまで送つて頂いてもお名残

りが盡きません、これで征きます

母「そふけ、もつと送つてやりてえがの、夕餉のこしら

えも有るげに、……ナラこれでいきますすけ、折角の休

みに樂もさせいで働かしてばかし、すまなかつたのふ

定「勿體ないおつ母さん……人の子として當然の事であ

ります

母「それからの、これは鎮守さまのお守りじやで、粗末

にせん様に體へつけんさい

定「ハイ、……いろ〜お心づかひ、有難ふございます

……それではおつ母さん

母「氣をつけての

定「……………」

〜こゝは川追、向ふは日野山、中を流れる可愛川

見送る瞳、一時雨、野分の風に吹き分かれ消ゆる姿に  
伏し拜む心ぞ清き眞珠灣

珠と碎け花と散る今ぞ歸らぬ我心、堅く秘めたる奥底

も誰れにか岩佐海軍大尉、頭に頂く諸勇士の盡忠報國秋

ぞ今、門出を前に九勇士、中に横山海軍中尉、上田二等

兵曹と共々語る夜の空、流れて走る星一つ

横「上田

上「ハイ

横「見たか今のアノ流星を、あの星の飛び行く方こそ我

々の征く所だ、岩佐大尉を始め皆々今回の企圖も今日

あるを期したが爲めだ、とう〜其秋が來たのだ

上「ハイツそうですね、これ程最大の喜びはありません、

先刻も岩佐大尉より訓示を頂きました、萬全を期して

やります、何が何でも必ずやり抜きます、先程片山二

等兵曹が……あくる日のルーズベルトの泣き言を俺も

聞いたぞ閻魔の前で……とやつて居りました、想ふて

も痛快です

横「ウム、皆々苦勞の仕甲斐があつたと言ふものだよ……

……が、想へば永い間苦勞をかけたなア、よく面倒を見

てくれた改めて禮を言ひます

上「滅相もない、至らぬ自分をこれまでの御訓育、今又

この名譽ある壯舉にお伴が叶ひ、上田、この上の喜びはありません

横「ウムよく言つてくれた、しかし乍ら君達の家族に對

しては實に氣の毒に思ふて居る

上「御言葉恐縮に存じますが、軍人の家族としては如何

なる人も一旦緩急の場合御國に殉ずる事は至高の名譽

これに過ぐるはなく、我日本人である限り誰れしも喜

ぶ事と存じます、私も過日歸省の際、兩親より言はれ

ました、我子にして我子でない、大君に捧げまつゝた

お前だから一朝有事の際は立派な帝國軍人として人後

に落ちず、笑はれぬ様にと……横山中尉……不肖の上

田にも親は過ぎたる者でございます……イヤ……コレ

ハ、子として親の自慢話し……どうかお聞き流しを願

ひます

横「イヤ、そうでない、立派な兩親だ……わしにも父に

は死別したが現在猶母が居る……強い……そして優し

い母だ、上田、見へるかこれが母だ……想へば今日ま

で皇恩の萬分の一にも報ひ奉る事もなく、また二十三

年の母の慈悲に對し、十分の孝養も盡しえなんだ、お

母さん、今日こそ横山中尉、死所をえて醜の御楯と散

り皇恩の萬分にも報ひ奉りますなればすべてを御寛容

願ひます、これが私の孝の始めであり、また、終りで

もありません……お母さん、どうか御壯健で……

も心の内、在ますが如き寫し繪の母の面に浮く笑顔、

孝は忠たり一道の心を想ひ上田もまた、取り出す包み土

の香に父母の情けの重き艦、輕き命の捨て所

横「上田……何だそれは……

上「ハイ、土であります

横「何……土？」

上「ハイツ、自分は農家に育ち、土は一入なつかしく想

ひます、稲垣二等兵曹も今度歸郷の時、祖先の墳墓の

土を持つて歸りました、思ひは同じだらうと存じます

……この土には、父の情けもあり、母の愛もこもつて

居ります、この度の事、何國に置いて散りますとも、

この日本の土の香は永しへに、八紘一字の御精神とな

りませう……

横「上田ッ

上「ハイ

横「床しい、美しい心だ、それでこそ、帝國軍人だ、その皇徳に浴せんこそ、我々の念願だ、萬全を期してぬかりなく

上「ハイッ必ずやりとげます。死してもなほ止まざる心です

横「ウム、互ひに心を清め、皇恩に報ひ奉らう……今宵最後の故國の空、別れに望み……皇居に向ひ奉り、壽の萬歳を壽ぎまつる……氣をつけッ……

(擧手の禮)

海行かば水漬く屍、山行かば草むす屍大君の爲には何ぞ

命をや何惜しからぬ軍人香りも床りし梅の花、一片散るや君に忠、二片散るや父母に孝、散にし後ぞ結ぶ實の、家門の譽れ過ぐる日の幼姿の偲ばるゝ、誰が口ずさむか子守唄、ねんねるよ、ねんねるよ、ねんねの子守はどこサ行た、お濕洗ひに里さ行た、里サおごふに何もろた、宮島杓子に貝細工

母「一定……よくやつてくれたのふ、お父つさんもおつ母もお前の戦死の死らせを聞いた時きや、どげえ嬉しかつたか……聞きや、この墓の土を持つて行つたさうな

げ、其時から戦死の覺悟で居たんじやの、ふ今から思へば弟や妹に土産サ呉れた時、紙包から土がこぼれた様に思ふたがこの土であつたんじやの、ふよく持つて居てくれたのふ

父「おつ母ア、目出てえ、定の戦死の奉告じやけ……涙サ、出すなよ

母「天子さまの御爲じやもん、悲しかねえが……つい……つい、嬉しふての、……かんにんして下つせ、定や何れ靖國サアへ、逢ひに行くけにの……

父「サアモウそろそろお天道さまの上がらつしやる頃ぢや、……二人で拜んで歸ろけ……

母「ハイ……

悲し涙は出さねども、嬉し涙に明けの鐘、寂滅爲樂とひどくとも、聞いて驚く人もなし、梅は散りても實はみゆる、鳥は古巢へ歸れども、

母「父さん倅の手植えの梅の木にあれ驚が……父「ムウ驚も泣いてくれるか、

征きて歸らぬ死出の海、泣くな歎くな必ず歸る、桐の小箱に錦の衣、逢ふは九段の坂の上、雲なく晴れて軍神還らぬ五艇九勇士の、其名特別攻撃隊、登る旭の御光りに譽れは世々に輝きぬ、譽れは世々に輝かん



娘

野崎村の段

親久作	娘お光	娘お染	丁稚久松	下女およじ	母お勝					
竹本住太夫	竹本七五三太夫	竹本田喜太夫	竹本津磨太夫	竹本越名太夫	竹本呂賀太夫	竹本富太夫	竹本三瀧太夫	鶴澤綱造	野澤吉三郎	竹澤徳團若

新版歌祭文

野崎村の段

寛永五年正月（二三六八）のお染久松の情死事件を脚色して歌舞伎に最初上演したのは寛永七年（二三七〇）正月、大阪荻野八重桐座の「心中鬼門角」で、當時歌祭文にも唄はれて大阪市中の評判であつた。この人氣を利用して淨瑠璃に仕組んだのが正徳元年四月（二三七一）豊竹座上演の紀海音作「お染久松袂の白しぼり」で、同系狂言の源となつた。次いで明和四年（二四二七）十二月、大阪北堀江座上演の菅專助作「染模様妹背門松」となり、これらを粉本として安永九年九月（二四四〇）大阪竹本座に近松半二作のこの「新版歌祭文」が上演された。これは座摩社の段、野崎村の段、長町の段、油屋の段の全二卷四段よりなり、殊に野崎村の段が有名である後、文化元年（二四六四）八月、佐川魚磨作「増補新版歌祭文」が出た。

梗 概

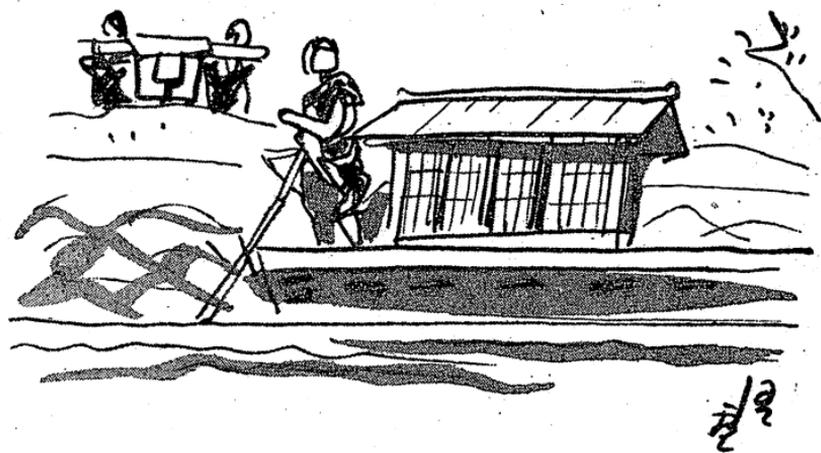
人形役割	
娘	お光
娘	お染
丁稚	久松
母親	お勝
下女	お芳
親	久作
船頭	吉田玉徳
	桐竹紋十郎
	桐竹龜松
	吉田榮三郎
	桐竹政龜
	桐竹紋司
	桐竹門造

疎々たる枝に初梅の、花咲く村の春景色。

娘お光は氣もいそ／＼、日頃の願ひが叶つて久松と女夫になれるのも、天神様や觀音様、第一は親のお蔭。こんな事なら今朝あたり、髪を結ふて置かうもの、鐵漿の付けやう挨拶も、どう云ふて能かるやら……と揉手やら、辭儀の眞似やら落着かず、勝手から俎板や庖丁を提出して、祝言の用意の膾大根をちよき／＼と刻み出した。

と、久松の跡を慕ふて堤傳ひ、下女およしを連れて來た油屋の娘お染が、船の上り場で教へられた梅を目當てに久作の家を探し當て、下女を戻すと立寄る門口、今日大阪から久松と云ふ人が戻つて見えた筈、ちよつと逢はせて下さんせ………と言ふ。

其の聽聞くと、思ひ當る節のあるお光、俎板押し遣り、昵々と戶外を覗いて悒氣の初物、最うも



や／＼と胸は掻き亂れ、何ぢや、久松さんに逢はせて呉れ、そんなお方はこちや知らぬ、と、膠もない腹立ち聲。

其様子がお染は腑に落ちず、ふと思ひ付いて、土産代りに伏紗包みの香箱を差出すと、こりや何ぢやえ、大所の御寮人様、様々と云はれても、心が至らぬ措かしやんせ、在所の女子と侮つてか欲しくばお前に遣るわいなあと、香箱投げ付け、門びつしやり。

其處へ久松連れて出る久作、久松に肩を揉ませお光には灸を點えさせるが、お染の門に居るのを氣付いた久松の、折が悪いと目顔で止めるのが、お光には又妬ましくして諍ひを初め、夢中になつた揚句は、久作の頭へ灸を點える始末、其れを久作が仲裁して、仲直しが直ぐに取結びの盃、髪も結ふたり、鐵漿も付けたり、湯も使ふて花嫁御、作つて置けと打笑ひ、お光を連れて納戸へ入る。

其間遅しとお染は駈入り、山家屋へ嫁入せいと

は胸欲ぢや、其方は思切る氣でも、わしや何ぼでも得切られぬ、と久松が残して來た文を突付け搔口説き、用意の剃刀で自害しやうとするので、久松も所詮は深い惡縁と思ひ、お染の手を執つて泣き悲しむ。

始終を立聽いた久作が出て、久松は實の子で無く、二本差す家柄に生れたのを、妹が乳母で有つた關係から引取つて養つた事から、智慧付けの爲に油屋へ丁稚奉公に出した事を語り、親方の恩も義理も辨へず、嫁入の極まつたお主の娘を唆かす久松を責め、又、お夏清十郎の昔語りに擬え、二人の不心得を懇ろに誡め、理を盡して別れる様に合點させると、只聞き入れたとの返辭を喜んで、お光を呼出し、祝言させよと綿帽子を脱れば、島田鬚が根元から切つてあつた。

事の意外に皆なが驚くのをお光は押えて、お二人が思ひ切つたと云ふは表向、底の心はお二人な

がら、死ぬる覺悟と知た故、何うぞお命取止めたさ、わしや最うとんと思ひ切つた。さあ、切つて祝うた髮容……と兩肌脱げば、下着は白無垢、首には五條袈裟をかけて居る。

玉より清き貞心に、今更ら何と言葉さへ、久松お染が面目なさに、自害しやうとするを久作は止め、蝶よ花よと樂んだ、一人娘を尼にして、出來したと云ふ心の中、思ひやりが有るなれば、何故存らへては下さらぬ……と、二人を諫めて合點させ、嘸ぞ母御様が案じてござらう、大事な娘御誰か確な者に送らせ度いものぢやと、久作が案ずる折、油屋の後家お勝が入つて來た。

様子を残らず表で立聽き、久作の親切、お光の志しを心で拜んで居たお勝は、二人に禮を述べ、世上の補ひ、心の遠慮から、駕で堤を大阪へ戻る久松とは別れくに、お染を連れて、船で戻る事にする。

(佐和利) 野崎村の段

其間遅しとかけ入お染、逢たかつたと久松に縋り付ばア、コレ聲が高うござります、思ひがけない愛へはどうして、譯を聞して〜と問はれて漸々顔を上げ、譯はそつちに覺があらふ、私が事は思切山家やへ嫁入せいと残して置やつたコレ此文、そなたは思ひ切る氣でも、わしやなんぼでも、得切らぬ、餘り逢たさなつかしき、勿體ない事ながら、観音様をかこつけて、あいに北やら南やら、しらぬ在所も厭ひはせぬ、二人いつしよに添ふなら飯も焚ふし、織つむぎ、どんな貧しい暮しても、わしや嬉しいと思ふ物、女の道を背けとは聞へぬわいのどうよくと、恨のたけを友禪の振の袂に北時雨、晴間はさらになかりけり。

兄さんお健でお染様、モウおさらばと詞まで、早改まるお光尼、あはれをよそに水馴棹、船にも積れぬお主の御恩、親の恵の冥加ない、取分てお光殿、こうなりきたるも先の世の定まり事とあきらめて、お年寄れた親達に

介抱頼むと言さして、泣音伏籠の面ぶせ船の中にも聲上て、よしないわし故お光様の縁を切らしたお憎しみ、勘忍して下さんせ、ア、譯もないお染様、浮世放れた尼じや物、そんな心を勿體ない、短氣おこして下さんすなへア、娘が言通り、死で花實は咲ぬ梅、一本花にならぬ様目出たい盛りを見せてくれ、随分達者で、ハイ〜お前も御無事で、お袋様とお娘御もおさらば〜さらば〜と遠ざかる。船と堤は隔たれど、縁を引綱一すじに、思ひあふたる戀中も、義理の柵情のかせぐいかごに比翼を引わくるこゝろ〜ぞ世なりけり。





# 文樂鑑賞手引

文樂の鑑賞に役立ちさうなことを、簡単に、全體的の事についてだけ書いて見よう。

文樂座のこと——人形淨瑠璃の組織とその由來  
——舞臺のこと——人形の遣ひ方のこと——だいたい、そんな順序で申上げてみませう。

人形淨瑠璃では、文樂がたつた一つの傳存劇團になつてしまつた。地方的、郷土的にはほかにあるが、常設劇場を有するものと言つてはない。けれども、文樂は寛政年度、おほよそ百五十年ほど前、淡路の人植村文樂軒によつて大阪に生れた劇場である。さうして、この三四十年來は、殆ど

本邦唯一の人形劇團なのであつて見れば、「文樂」が「人形淨瑠璃芝居」の同義語のやうになつたのも當然でせう。古い所では、江戸にも大阪にも、五座七座と人形芝居があつて、歌舞伎に對抗し、時としては、享保から寶曆あたりまでは、つまり二百年前には、人形芝居のほうが盛んであつた。

普通に、三業より成り立つと言はれる。即ち、淨瑠璃を語る太夫と三味線弾きと人形遣ひの三者によつて組織されてゐるからである。ところで、この三者は、初めから一緒に生れて發達して來たかといふに、さうではなかつた。

人形を遣ふといふこと、これはすうつと古くからありました。記録にあらはれた所では、遠く平安時代に傀儡子（くゞつまはし）といふものが見える。傀儡子は、支那の西方、中央アジア地方から漂遊して来た街頭演藝人であつたらしく、平安時代とあれば約一千年の前のことになる。淨瑠璃は足利時代中期の發生となつてゐるから、五百年の歴史と言へるでせう。これに對して、三味線は永祿年中に、琉球から泉州堺港に輸入された蛇皮線の本邦化なのであるから、ザツと三百七十八年前の舶來樂器である。先づ淨瑠璃と三味線とが提携し、慶長の初年あたりに、その淨瑠璃と人形遣ひとが握手して、淨瑠璃といふ物語を、言はゞ立體的に空間的に演奏するやうになつた。これが人形淨瑠璃劇の濫觴だといふことになる。

併しながら、その淨瑠璃界に竹本義太夫があら

はれて音樂上の大成を試み、作者近松門左衛門を得て、戯曲的展開をも試みたのは、元祿時代のことに屬する。爾來二百五十年間、人形淨瑠璃芝居とあれば、義太夫節に限るやうになつたのであつた。これは來歴のあらましであるが、淨瑠璃と三味線とによる演奏内容と、人形の動作とがピッタリ合致して、三者諧調の美によつて成立する藝術なる點に、先づ御留意ありたい。

次に、人形と人形遣ひのこと。これも歴史的に言ふと、面倒だから、簡單に記す。

人形が手も足もないデクノボーから、肩板が發明され、手、足が生じ、口や眼の開閉や眉の上下が研究され、手の五指が折り屈みをするやうになるまでには、容易ならぬ年月と、人知とが費された。一個の人形を三人がゝりで、寫實的に遣ふや

うになつたのが享保十九年の「蘆屋道満大内鑑」  
（葛の葉の狂言）からといふことになつてゐる。  
今日から大凡二百年前にあたる。但し、文樂座で  
もツメ人形（略してツメ）と呼ばれる、ごく下ツ  
端の役柄のは、一人で一個の人形を遣ふので、原  
始形式の人形なのです。

現今、文樂座の座頭と呼ばれる吉田榮三とか、  
吉田文五郎とかいふ上だつた遣ひ手、實盛なら實  
盛、お園ならお園の遣ひ手として、番附の上に記  
載されてゐるのは、「主遣ひ」と呼ばれる主任者  
で、頭と右手の動作を受け持つ。「左り」と呼ば  
れて左り手だけを遣ふ人が一人、「足遣ひ」とい  
ふ兩足の動作を受け持つのが一人。つまり三人遣  
ひといふことになる。この三人が主遣ひの呼吸に  
合せ、動作せしめてこそ、統一ある一個の人形と  
して演技するので、これがまたむつかしい。足遣

ひだけで十年近くも働らき、それから左りにまは  
り、やがて主遣ひに進む。

人形淨瑠璃の舞臺——それにも幾變遷があつた  
慶長以前の傀儡子時代のは、所謂首掛芝居で、一  
尺巾に二尺か二尺五寸限度の長方形の箱が舞臺で  
あつた。それが次第に擴大されて、明治座の舞臺  
でも、歌舞伎座のでも、何とかして使ふやうにな  
つた。現今の大阪文樂座の舞臺は、間口が六間よ  
り少しつまつた程度であるが、それ以前のは三四  
間から五間くらゐのものであつたらしい。手遣ひ  
式でない絲繰り式のもつと規模が小さかつた。  
今の舞臺は、見物席寄りに三尺ほどの幅で、使  
はない部分がある。これが三の手。それから船底  
とも呼ばれて床の低くなつてゐるところ、歌舞伎  
の平舞臺に該當する部分が二の手である。二重舞

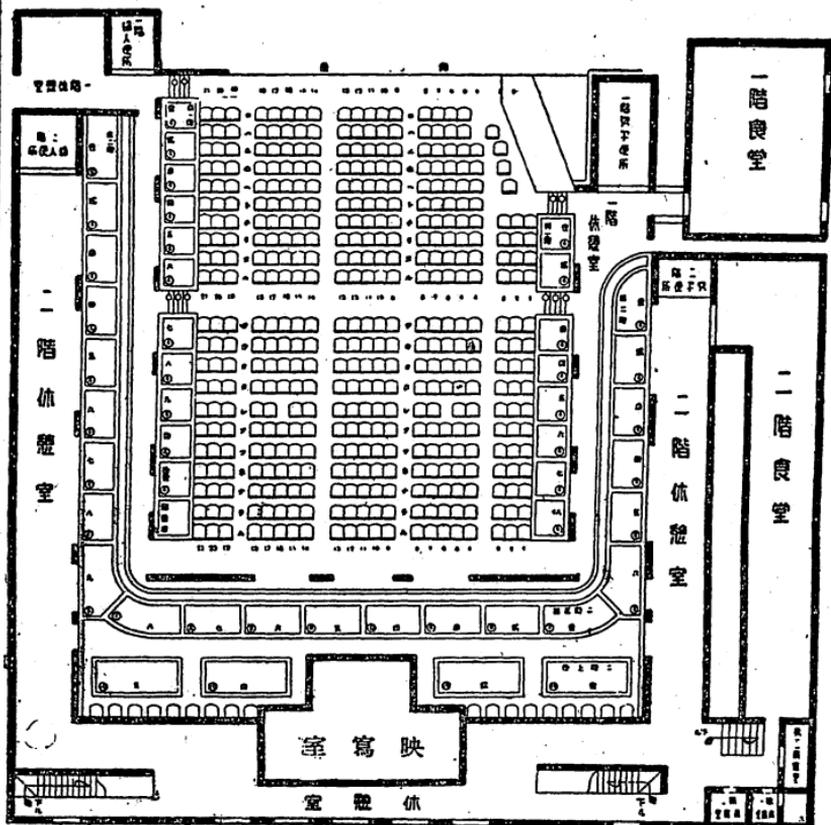
臺に相當して、屋内に用ひられる。最も奥に位した部分は一の手、または本手といふ。元來は本手といふ本舞臺だけであつたのが、次第に擴大されて、二の手三の手と見物席の方へ張り延ばしたからの名稱である。

また、太夫と三味線とが、向つて右側へ張り出した床で語り、弾く。即ち横床といふものになつたのも享保年度のこと、義太夫近松頃のは、特別の場合以外は、正面の御簾の内側で語つたのである。人形遣ひも、その頃はからだを現はして使はずに、幕の蔭から人形を差し上げて遣つたもので、「蔭語り、蔭遣ひ」と呼ぶ演出形式であつたそれが次第に「出語り、出遣ひ」といふ形式に移行し、結局今日のやうな演出形態になつたのである。それでも、東京興行の場合のやうに、人形遣ひが序幕から切りまで、黒の頭巾をかぶらずに、

出遣ひばりといふやうなことは、ごく近年になつての現象です。人形劇として見れば、人形遣ひは頭巾をかぶつてゐるのが本來であること申すまでもありません。

人形芝居といふものは、世界中に分布されてゐます。未開既開の民族を問はず、甚だ廣く、また古く行はれてゐる。けれども、日本のやうに發達したものは、殆ど類例がありません。淨瑠璃といふ音楽は別としても、「假名手本忠臣藏」や「菅原傳授手習鑑」のやうな、大きなスケールの、人形劇臺本といふものや、或は三人遣ひの人形で、複雑な演出をするが如きものは、嘗てないとされてゐる。

# 文樂座御劇場席案内



御観覧席は大部分椅子席になつて居りますからお一人でも御愉快に洋服でもお樂に御見物が出来、またお出入が御自由です。

前賣切符・壹等席のお切符は五日前から發賣致します。また五日以後のお切符も壹等席に限り御豫約申し上げますから上圖の座席表に依つてお早く御望みの御場席をお申し込みになればお心のまゝにお好きな處が御自由にとれます。御用命のお節お呼出しの電話は

南四七壹壹番で御座ります。

切符賣場・右指定席切符は當日前賣とも正面西側本家入口にて發賣して居ります。

二等席・三等席切符は當日正面入口にて發賣致します。

# 四月の芝居御案内

東京四座 南座 <small>電話一五一五</small>	道頓堀 辨天座 <small>電話二七八七</small>	道頓堀 角座 <small>電話二二二一</small>	道頓堀 中座 <small>電話一九七二</small>	大阪 歌舞伎座 <small>電話二八六二</small>
一日 正午 開演 二時	一日 正午 開演 二時	一日 正午 開演 二時	一日 正午 開演 二時	一日 正午 開演 二時
松竹家庭劇	不二洋子一座	厚生劇	大歌舞伎	曾我廼家郎劇
第一 亭主のあら煮 第二 女の世 第三 石に刻む忠 第四 ぢいさんばあさん	第一 法を護る者 第二 臣道誓の復讐 第三 山中小唄	第一 希海の望峰 第二 松菊の抄 第三 奴菊寺 第四 道成寺	通し狂言 假名手本忠臣藏 五幕十二場	(晝の部) 電報の船 (夜の部) 宣傳萬能 かくれん坊 心くねん 紅の渦 一渦點
一等席 二圓 二等席 一圓 三等席 七角 四等席 五角 觀劇料 十錢 (入場税別)	一等席 六圓 二等席 三圓 觀劇料 九錢 (入場税別)	特等席 二圓 一等席 一圓 二等席 七角 三等席 五角 四等席 三角 觀劇料 十錢 (入場税別)	特等席 四圓 一等席 三圓 二等席 二圓 三等席 一圓 四等席 五角 五等席 三角 觀劇料 十錢 (入場税別)	櫻席 八圓 菊席 五圓 一等席 三圓 二等席 一圓 觀劇料 十錢 (入場税別)

# 開演毎に一方ならぬ御後援御來觀を賜り厚く御禮申上ます

**當文樂座は** 既に皆様御承知の通り我大阪に於ける郷土藝術、三位一

體の人形淨瑠璃の日本唯一の公演場である

**文樂座人形淨瑠璃は** 常に大阪の誇りとする舞臺藝術のみならず我

日本に於ける古典舞臺藝術の至寶として世界に誇るべきものでありま

す。従つて開場毎にこの大使命が全う出来ませうやう、皆様の御期待に

背かぬ様、皆様に御満足して頂けるやうと一同不斷の努力を致して居

りますが尚御氣付きの點は御客様の御聲として承りたく存じます。

**御携帶品は** 正面一階に御預り所が御座ります。お帽子は椅子の下に

設備がありますからこれへお願ひ致します。お歸りは混雑致しますが

らお履物は成べく終演一幕前に御受取願ひます。

**貴重品は** 各自にお持ち下さい。お場席お立ちのときは御携帶願ひます

**お煙草は** 一階、二階廊下に喫煙台を備へてありますからお煙草はぜひ

此處でお願ひ致します。お席では御遠慮下さい。

**お食事は** 西側別館の階上、階下に大食堂と喫茶室が御座ります。

**賣店**は 二階東側と二階西側休憩所に御座ります。

**お化粧とお手洗** 殿方は西側の一階と二階に、御婦人は東側の一階と

二階に御座ります。

**場内にて** 寫眞撮影は絶對にお断り致します。

**御休憩の間は** 一階西側に給茶處と大休憩所の設備が御座ります。

**お出口は** 下足札赤札は正面西本家入口でお渡し致します。黒札は正面

入口東側でお渡し致します。

**案内人は** 胸に番號人マークを附けて居りますから御用の節は御中附け

下さい、其他一般従業員に不行届の點は御遠慮なく御注意の程お願ひ

いたします。

**出演者** 病氣其他の事故にて出場不可能の場合は乍勝手代役にて相助

めますから豫め御諒承願ひます。

◇皆様へ御案内◇

當座は此度皆様へのあらゆるサービス機關として

案内を特設いたしました。

人形淨瑠璃についての御質問・各種團體御觀賞會・又は諸種の御

會合席上へ出張公演等御相談に應じ、よろづ御案内申上ける事に

致しました。御一報次第登壇上、どうぞ御利用下さいませ。

専用電話南⑦三七八八番

松竹株式會社

文樂座

支配人 下村清次郎

昭和十七年三月卅一日印刷

大阪市南區久左衛門町八番地

昭和十七年四月一日發行 發行所 松竹株式會社大阪支店

大阪市南區久左衛門町八

松竹株式會社大阪支店内

編輯兼 發行人 鳥江鏡也

大阪市西區土佐堀通一丁目十二

印刷所 永井日英堂印刷所

一部 金二十錢

